

二〇二四年度B

国語 (60分)

〈注意〉

- (一) 開始のチャイムが鳴るまで、この冊子を開いてはいけません。
- (二) 問題は1ページから34ページに印刷されています。
- (三) 受験番号と氏名は解答用紙の定められたところに記入しなさい。
- (四) 解答はすべて解答用紙の定められたところに記入しなさい。

受 験 番 号			

I

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

「みえてはいるが誰れもみていないものをみえるようにするのが、詩だ」。

これは、詩人の長田弘^{おさだひろし}が一九七三年に『アウシユビッツへの旅』のなかに書きつけた言葉だ。これは同時に哲学の定義でもあると、わたしはおもう。哲学という言葉が硬ければ、じぶんが生きているその時代を考えることの定義と言ってもよい。そういえば、観念論の代名詞のようにいわれるあのヘーゲルも『法の哲学』のなかにこんな文章を書きつけていた。

「だれでもともとその時代の息子であるが、哲学もまた、その時代を思想のうちにとらえたものである」と。

わたしたちにいま何が見えているのだろうか。見えているのに見えないものとは何か。見えているのに見えないものを見えるようにするとはどういうことなのか。

いま、わたしたちの視野はどんなふうになっているのだろうか。時代の何を見ているのか、何が見えているのか。

時代の事実というものをわたしたちは新聞やテレビ報道で知る。イラクのこと、北朝鮮のこと、米国のこと、そして永田町のこと。そして世間話の種にする。ときに泡を吹かせて。だが、それを目撃したひとはだれもいない。ましてやそれと同じときに起こっている別の出来事はほとんど知らない。たとえばこの同じ時代（二〇〇三年時点）に米国で起こっているイラク攻撃反対運動の大きなうねりについて。それを見て見ぬふりをする評論家も交えて、^①テレビ報道じたいがひとつの世間話になっている。政治は、世間話を織り重ねるといふかたちでしかわたしたちの日常に届かない。そしてそれは話題として消費され、ほとぼりが冷めるとすぐに忘れられる。

世間話をひとしきりしたあと、われにかえる。腹の虫養いにバナナを一本、口にする。このバナナはどこ産かとふとおもうこともないではない。が、思いはそこで止まる。値段のことはおもっても、

A

こんなに安いのか、だれがそれを決めているのか、だれ

がどこでどのようにして栽培しているのかは、B だれも知らない。知ろうとしない。バナナはどういう存在としてわたしたちの社会に届けられているのか、それを見えるバナナのなかに見ようとするひとは少ない。

フィリピンのミンダナオ島から日本へのこのありふれた食物の経路をたどるなかで、米国を本拠とする多国籍企業の利権、C 栽培しても借金漬けから逃れられない農園労働力の搾取の構造、さらにはフィリピンの戦後社会の展開や日本国家のアジア植民の歴史にまで推理を進め、東アジアをめぐる現代史の一側面を描ききった仕事はD あった。鶴見良行の『バナナと日本人』（岩波新書）だ。が、この、自分の視野を世界へと向けてこじ開ける仕事は十分に受け継がれていない。それどころか、視野はますます縮こまってきている。

生老病死、つまり生きものとしてのじぶんの基本的なかたちもまた見えにくくなっている。出産の情景、死後の遺体処理をつぶさに見たことがわたしにはない。からだの不具合の診断・治療は医療機関に、父の介護は施設に頼ってきた。魚をじぶんでうまくさばくことができない。排泄物の処理過程についても知らない。そういえば、他人のうんこをみたことがない子どもが増えているとも耳にする。わたしたちは自分の身体さえよくは知らない、まかなえない、と言わざるをえなくなっている。

わたしたちはいつのまにこんなに無力になってしまったのだろう。いつのまにこんなに視力が落ちてしまったのだろう。

一時期、若いひとたちのあいだで、「見えちゃってる」「なんかもう済んだ感じ」といった言葉が流行ったことがある。大人たちを見ていて、人生のパターンがその終わり方までぜんぶ見えている、もう新しい生き方なんてない、といった想いがつのってきたのだろう。何をして結局は変わらないという無力な想いが。けれどもほんとうにぜんぶ「見えちゃって」いたのか。むしろ、見えているのに見ることができない、その焦燥にじりじりしての言葉だったのではないのか。

だれもが、よほど眼をこらさないことには、意識的に視界をこじ開けるといふことをしないでは、世界が見えるようにはならない、そんな見えにくい時代に入って、ずいぶん時間が経ったような気がする。

*

「見えちゃっている」という、一頃若いひとのあいだでよく口にされた言葉への、わたしのなかの抵抗感についてはすでに述べた。この抵抗感はおそらく歳をとればとるほど強くなるのではないかとおもう。だからしつこいようだが、もういちど、感想を述べておく。

学校を卒業して、会社に入って、何のためかよくわからなくなるくらい忙しく働いて、五十くらいでマドギワに追いやられ、やがて「慎ましやかな」年金生活に入る。結婚して、ひとり子どもを育て、疲れ果てて神経がささくれだし、友だちとすこしばかり遊んでもどこかソウシツ感につきまとわれているうち、肌のみずみずしさも失ってやがて「おばあちゃん」になる。ちよつと突っ張って、アートとかバンドとかやっても、うまくいったところでせいぜい一発止まり、あとは定職のない身で日々の小銭カセぎに右往左往するばかり……。そう、何もかも見えちゃっているという、なんとも力のない物言いだ。

たしかにそうだ、と口をそろえたくなる。見かけからすれば、たぶん多くのひとはそういう人生を送ることになるのだろう。まわりを見わたせば、たしかにそんなふうに見えないこともない。が、^②この感想にはどこか不遜なところがある。

不遜？ 思い描く「未来」があまりに定型的だと言いたいのではない。多くのひとは定型に沿って一生をツムぐ。そのことが不遜だという気はモウトウない。^③この言葉に決定的に欠けているものがある。それを不遜と言いたいのだ。

この言葉に欠けているものは、それは、おもいもよらず見舞われること、そのことを視野に入れていないということである。たとえば重い病気に罹る、おもいもよらぬ事故に遭う、大切なひとを突然失う……といった、おもいがけなく見舞われる「不幸」を、この言葉は勘定に入れていない。だれかと出逢って、人生の向きがくるつと変わってしまうということも予想していない。要するに、偶然というものをすべて脱落させたところで、人生を語っているということである。

ひとの人生というものは、みずからの出生からはじまって、つねにだれかとの偶然の出逢いのなかで、特定の他者との押したり引いたりという関係とそのほどこようなないもつれのなかで編まれてゆく。だれも、この家、この地域で育ちたい、こんな先生に習いたい、こんなひとと結婚したい、こんな会社に入りたい……とおもって生まれてきたわけではない。約めて言えば、こうだ。ひとは

ひとりでは生きてゆけない、食べることも眠ることも、ときに見えない他人の助けを借りてでなければできない、〈わたし〉の生は他のだれかとの関係につねに組み込まれている、だからその「だれ」を外して〈わたし〉の生は語れない、だから〈わたし〉の生は〈わたし〉のものようであってほんとうは〈わたし〉のものではない。〈わたし〉の生が他の何にも代えられない特異性をもっているとすればそれは〈わたし〉がかかわる他者のそれに、というか他者のそれとのかかわりあいによって由来する、ということである。

要するに、「見えちゃっている」というあの言葉には、〈わたし〉の生を編む偶然の出逢いとそれに由来する存在の特異性への想像が欠けている。ひとの生は、まっすぐな一本線ではなく、異なる出逢いの断続というかたちでしかイメージできないはずのものである。

さて、〈古い〉の語りについてなのだが、その語りについてもほぼ同じことがいえるようにおもう。現代の〈古い〉の語りのなかでかき消されているもの、それはそれぞれの〈古い〉が懐深くはらむ偶然性と特異性へのまなざしである。

③ いま〈古い〉について考えるとき、どうして話がすぐに、少子高齢化社会だの、介護保険だの、痴呆ちほうケアだのといったふうに、「問題」に行ってしまうのだろう。〈古い〉はなによりも「問題」だと言わんばかりに。

ほんとうならわざわざ言うまでもないことであるはずなのだが、〈古い〉とは、ひとにとって自然的な過程である。夭逝ようせいするひとをのぞいて、だれもがいつかは〈古い〉を迎える。〈死〉の前に、である。そして〈死〉もまた、ひとの自然的な過程である。〈死〉はだれにもいつか訪れる。が、そのいつかはだれにもわからない。〈古い〉は、その意味で、からだの衰えを自覚する時期であるとともに、みずからの〈死〉への待機の時期でもある。じぶんが待機中であることが、じわりじわり意識されるようになるのが、〈古い〉というものである。なのに、〈古い〉をひとりひとりがどのように迎えるかが問われるよりも先に、〈古い〉が匿名の集団、つまりは特定の年齢層の存在様態として、まずは「問題」としてしか問題にならないのは、いったいどういうわけか。

答えははっきりしている。先に見た、養うものと養われる者という関係が家族のなかに設定されているのとおなじで、〈古い〉がそれをじぶんのこととして迎える側からではなく、老いゆくひとを「世話」する側からばかり語りだされているからである。〈古い〉

はそれを未だ迎えていないひとからすれば「問題」であるのかもしれないが、老いゆくひとそのひとからすれば「問題」でもなんでもなく、ひとつの自然過程であるはずである。「老い」は、それを介護する側からすれば、まず「問題」として立ち現れる、ただそれだけのことである。

が、しかし、「老い」は老いゆくひとそのひとからも語られるべきものであるはずだ。たしかに老いゆくひとたちもみずからの「老い」について語る。たとえば雑誌が「老い」の特集を組むとき、さまざまな「老い」のかたちが老いゆくひとによって語りだされる。しかもたいていは、充足した言葉で。だが、^④「老い」の異様さの経験が老いゆくひと自身によって語られることは存外少ない。なぜか。「老い」は「老い」について語るその意識をも^⑤浸潤してくるものだからだ。「老い」について語る語り方のなかにも「老い」はしのびよる。そしてその「老い」は、「老い」を迎える前の、つまりは「引退」以前の精神の構えを裏切るものという性格をつよく帯びている。

何かを作品のようにして作る、そういう構えとは反対に、消える、亡くなるという^⑥契機が「老い」には否定しようもなく組み込まれているからだ。したがって、みずからの「老い」について語ったり書いたりするにあたっても、それがほんとうに「老い」にふれているときには、物語にする、文章にするというのは違った語りなり文なりになるはずだ。もちろん、生は時間とともに単純になつて、やがて消えゆくという、きれいな物語をここで思い描いているわけではない。最期とおもうがゆえにますます想いはつり、関係は屈折し、こじれてゆく。引き返すということが絶対に不可能なのがひとの生だ。その、引き返しの不可能なかに、そのひとの **E** は現われる。だれかとの関係の抜き差しならなさが高じれば高じるほど、そこにそのひとの **E** が否定しようのないものになつてくる。

ぼそぼそ、あるいはぼつりぼつり漏れてくる、そういう声が聴きたい。そういう声が漏れてくる場所から、ひとの生について考えてみたい。

^⑦それは、「作る」世代の声とははつきり異質な声であるにちがいない。「あれもできなかった、これもできなかった」、「こんな何の

役にも立たないわたしでもまだここにいていいのか」……。はじめはそうしたネガティブな調子で語りだされるほかないのだが、それはしかし、「作る」「する」にのめり込んだ声とは異質な声としてやがて静かにとどろきはじめるだろう。

わたしたちの社会は、何をしたか、何を生み出してきたかでそのひとを測る生産主義や、何ができるか、どんな専門的技能があるかでひとを測る資格主義が、ひとつの^⑧格律として支配している社会である。それが要求してくる条件を満たすことがなければ、だれもが容赦なく「不要」の烙印を押されてしまう。老残、老醜、老廢、疲弊、減衰、萎縮、衰弱、下降、弛緩というふうには、〈古い〉が下り坂というイメージで思い描かれることになるのも、そうした生産主義や資格主義の視線のなかである。あるいはまた、高齢者が（子どもとともに）「養われる」べき受動的な存在とみなされることになるのも、やはりそうした視線のなかである。

^⑨ そういう視線を脱臼させるような違和の声、そのひとつひとつが聞こえるようになるかどうかには、「超高齢化社会」の行く末は懸かっている。なぜか。「福祉の達成」ということが人類社会のめざすところであると言うのなら、いかなるひとであれそのひとの存在をまずは肯定するところから、その理念は出立しなければならないはずだからである。何もできなくても、ただそこにいるだけでいいと、他者に向かって言い切れるかどうか、あるいは、まだ何もできない子どもとともに、だんだんいろんなことができない高齢者に向かつて、何もできなくていい、ただそこにいるだけでいいと、言い切れるかどうか。そこに「福祉」の理念は懸かっているからである。そういう地点から、いまの〈古い〉の問題を考えなければ、その一つ一つが特異な〈古い〉の声を、ひとはついに聞きそびれてしまうだろう。^⑩ そしてそれはそのまま、じぶんのなかの「弱い」声を聞き漏らしてしまうことでもある。

【問1】 二重傍線①②のカタカナを漢字に改めなさい（楷書で、丁寧を書くこと）。

- ① マドギワ ② ソウシツ ③ カセギ ④ ツムぐ ⑤ モウトウ

【問2】 傍線①「テレビ報道したいがひとつの世間話になっている」とありますが、どういうことですか。次の中から最も適当な

ものを選び、(イ)～(ホ)の符号で答えなさい。

(イ) テレビでの報道は世間に対して大きな影響を与えるものであるが、報道する側はその力を利用し、視聴者をあおりたてることを繰り返してしまっている、ということ。

(ロ) テレビ報道は視聴者にとってわかりやすく提供されるが、その内容は報道する側都合によって選択され、その場だけの話題として使い捨てられている、ということ。

(ハ) テレビにおける報道は以前に比べ視聴者の反応を気にする傾向にあり、難解な内容をもつ国際問題について過度に単純化して報道するようになっていく、ということ。

(ニ) テレビにおいて報道されたことを視聴者は事実と思いがちだが、その内容は報道する側によってねじ曲げられており、そこに客観的事実など存在しない、ということ。

(ホ) テレビ報道にとって視聴者の存在は欠かせないものであるが、視聴者の意見が報道内容に反映されるようになり、報道する側の主体性が失われてしまった、ということ。

【問3】 空欄A～Dに当てはまる語を次の中から選び、それぞれ（イ）～（チ）の符号で答えなさい。

- | | | | | | | | |
|-----|------|-----|-----|-----|----|-----|-----|
| （イ） | きわめて | （ロ） | かつて | （ハ） | なぜ | （ニ） | たぶん |
| （ホ） | かならず | （ヘ） | いくら | （ト） | さて | （チ） | たまに |

【問4】 傍線②「この感想にはどこか不遜なところがある」とありますが、どういうことですか。次の中から最も適当なものを選び、（イ）～（ホ）の符号で答えなさい。

び、（イ）～（ホ）の符号で答えなさい。

（イ） 他者との関係が自分の人生にさまざまな影響を与えろという可能性を、最初からまるで想定しない、自己中心的な態度である、ということ。

（ロ） 自分の将来に対して悲觀的な予想を示すだけに留^{とど}まって、現実社会が抱える問題に向き合おうとしない、消極的な態度である、ということ。

（ハ） 自分の想像する将来の社会の姿に固執するあまり、自分自身の幸福を追求しようと思ひもしない、極めて禁欲的な態度である、ということ。

（ニ） 生活を共にしている人々が、自分に対してどのような期待や願望を抱いているのかを考えようと思ひしない、冷淡な態度である、ということ。

（ホ） 平凡な人生だけを思ひ描いているようであり、実際は他人の生活を自分の将来のために利用しようという、傲慢^{ごうまん}な態度である、ということ。

【問5】 傍線③「いま〈老い〉について考えるとき、どうして話がすぐに、少子高齢化社会だの、介護保険だの、痴呆ちほうケアだのと

いったふうに、『問題』に行ってしまうのだろう」とありますが、これに関する次の説明文の空欄a～dに当てはまるものを後の選択肢からそれぞれ選び、(イ)～(リ)の符号で答えなさい。

筆者はここで、〈老い〉については老いる人自身を **a** とする視点から考えられるべきだ、と主張している。世間では、人が老いるということは「問題」として認識されており、そのことが問題であるというのだ。

〈老い〉とは誰もが **b** する自然なものであり、その過程は人によってさまざまである。だが、〈老い〉が問題として捉えられる際には、年齢という **c** 的基準によって区切られた集団としてしか、老いる人は扱われない。このような認識が広く浸透するのは、〈老い〉の問題が当事者の存在を **d** して語られるためである、と筆者は指摘している。

- | | | | | | |
|-----|----|-----|----|-----|----|
| (イ) | 軽視 | (ロ) | 主体 | (ハ) | 客観 |
| (ニ) | 経験 | (ホ) | 老害 | (ヘ) | 人工 |
| (ト) | 驚嘆 | (チ) | 尊重 | (リ) | 主観 |

【問6】

傍線④「〈老い〉の異様さの経験が老いゆくひと自身によって語られることは存外少ない」とありますが、筆者がこのように考える理由として最も適当なものを次の中から選び、(イ)～(ホ)の符号で答えなさい。

(イ) 老いて〈死〉を前にした者が、自分の人生を書き残しておきたいと強く希望したとしてもその望みをかなえる機会はすぐに失われていってしまうから。

(ロ) 実際にはそれまで苦難の連続であっても、〈死〉を迎えるにあたり満足すべき人生だったと高齢者の多くが自分に言い聞かせるようになっていくから。

(ハ) 自分の体験した〈老い〉について当事者が語りたいと思っても、現状においてその内容を忠実に再現することができずメディアは非常に限られているから。

(ニ) 〈老い〉を体験すると物事の認識や判断の基準があいまいになるため、自分の体験が他者と比べて違っているとは思わず、あえて語ろうとしなくなるから。

(ホ) 老いる前に想定していたものとは異なる〈老い〉を体験した際には、その当事者が自分の状況を表現する適切な言葉を見出すことも難しくなってしまうから。

【問7】 傍線⑤「浸潤」・⑥「契機」・⑧「格律」のここでの意味として、最も適当なものをそれぞれ選び、(イ) (二)の符号で答えなさい。

⑤「浸潤」

- (イ) ある物事が円滑に運ばれるよう、仲立ちとなってはたらきかけること。
- (ロ) ある要素が次第にしみこみ、気づかぬうちに徐々に広がっていくこと。
- (ハ) ある領域に押し入って、当事者の意に沿わないような行動を取ること。
- (ニ) ある一部分に、他の性質とは異質なものが混じって存在していること。

⑥「契機」

- (イ) 良い結果をおさめようとして、物事を実行に移すには最適な時期。
- (ロ) 何か出来事が予想もできないときに起こってしまう、不測の事態。
- (ハ) 根拠や要因として物事の本質に関わり、欠くことのできない要素。
- (ニ) ある効果を生じさせる目的で、当事者間で取り交わされる約束事。

⑧「格律」

- (イ) みんながそれに従うことを求められる、行為の基準。
- (ロ) 人の生き方を端的な言葉で言い表した、古人の言葉。
- (ハ) 社会秩序を守るために定められた、罰則を伴う法典。
- (ニ) 礼儀作法にかなっている、模範にすべき人間の態度。

【問8】 空欄Eに当てはまる語を、これより前の本文中から漢字3文字で抜き出し、解答欄に記しなさい。

【問9】 傍線⑦「それは、『作る』世代の声とはつきり異質な声であるにちがいない」とありますが、これに関する次の説明文を
読んで、(1)～(4)について適当なものを選び、それぞれ符号で答えなさい。

ここで筆者が言う「作る」世代には、(1)

という意味が含まれている。一方で、〈古い〉を迎えるということは

- (イ) 芸術を理解する心や創造性が備わっている
- (ロ) 社会の決まりに抗^{あらが}う自由が与えられている
- (ハ) 多くの時間や開けた未来が用意されている

人々である

(2)

- (ニ) 養われる者であるという自覚をもつことにもなる
- (ホ) どこかで死というものを意識せざるをえなくなる
- (ヘ) 孤独の中で自分の人生を振りかえることでもある

、と筆者は述べている。

現在〈古い〉が「問題」とされる際には、(3)

- (ト) 「する」ことにこそ価値が認められるという観点
- (チ) 「作る」ことだけが重要ではないのだという観点
- (リ) 「老いる」ことによって悟りが開けるといふ観点

が前提となってしまうている。しかし、実際に〈古い〉てゆく人々は、こうした単純な図式のなかにのみ存在して
いるわけではない。自分に残された時間がわずかだと感じた〈古い〉ゆく人の、

(4)

- (ヌ) 自分の思いを何度も書き直し作りあげた言葉
- (ル) 人生における後悔とともにつぶやかれる言葉
- (ヲ) その満ち足りた気持ちを伝えようとする言葉

に向き合う必要がある、と筆者は指摘している。

【問10】

傍線⑨「そういう視線を脱臼だつぎょうさせるような違和の声、そのひとつひとつが聞こえるようになるかどうかに、『超高齢化社

会』の行く末は懸かっている」とありますが、どういことですか。次の中から最も適当なものを選び、(イ)～(ホ)の符号で答えなさい。

(イ) 現在、人生のピークを過ぎていることを理由に高齢者たちは敬遠されているが、「超高齢化社会」になると俗世間のしがらみとは無縁な立場から発せられる高齢者の言葉に大きな価値が生まれることになる、ということ。

(ロ) 本来ならば社会に貢献する役割を担うべき高齢者が、そのチャンスを得られないまま亡くなっていくので、「超高齢化社会」においてはかれらが生産の場に復帰できるような環境作りをしなければならない、ということ。

(ハ) 生産主義によって発展してきた市場経済は深刻な行き詰まりを見せており、これからの「超高齢化社会」では高齢者たちの有する豊富な経験や知恵に学ぶことで、再び経済を活性化していかななくてはならない、ということ。

(ニ) 有用なものを生み出す能力のみを重視する社会は、高齢者を否定的なイメージで捉える傾向にあるが、「超高齢化社会」を迎えるにあたっては、そうした価値観を相対化する思考を獲得していく必要がある、ということ。

(ホ) 高齢者が人口の多くを占めるようになった現代においては、かれらの個別のニーズに応えられる体制を確立し、いつまでもゆとりのある生活を送ることができるような「超高齢化社会」を実現すべきである、ということ。

【問11】

傍線⑩「そしてそれはそのまま、じぶんのなかの『弱い』声を聞き漏らしてしまうこともある」とありますが、これに関する次の説明文の空欄a～dに当てはまるものを後の選択肢からそれぞれ選び、(イ)～(チ)の符号で答えなさい。

筆者は冒頭で「わたしたちにいま何が見えているのだろう」と問うていた。一時期流行った「見えちゃっている」という言葉は、aのなかでその人の生が編まれていく、という側面を無視した、自分の人生を安易な図式のなかでしかとらえないものだ指摘している。まさに「見えているのに見ていないもの」がそこにある、ということだろう。

〈古い〉に関する語りについても同様のことが言え、高齢者を養われるべき受動的な存在としてのみとらえ、あくまで「問題」として考えてしまいがちである。この社会に、何かを作り出すbが広がっているからこのことと言えそうだ。

そこで見過ごされてきた、cこそ、これからの社会にあつては必要だ、と筆者は強調している。これは「福祉の達成」を目指すための基本的な考え方であり、ひいてはdにもつながっていく。このような、「見えているのに見ていないものを見えるようにする」様々な作業が求められている、と主張するのだ。この文章が発表されてから約二〇年が経過しているが、当時に比べより一層「超高齢化社会」が進行している現在、わたしたちには何が見えているだろう。意識的に眼をこらし、耳をすませる必要性を、この文章は教えてくれる。

- (イ) 他者からの働きかけに動じない
- (ロ) 予測不可能な出来事との出会い
- (ハ) 生活問題を複雑化させる不要な対策
- (ニ) 誰もが豊かに安定して過ごせる社会

-
- (ホ) 人々が自分自身のありように向き合うこと
 - (ヘ) 高齢者と生活を共有しているひとの本音
 - (ト) 高齢者一人ひとりの存在を尊重する姿勢
 - (チ) 能力の有無によって人を測る価値基準

II

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

娘の登園時間は午前九時で、園ではいちばん遅い方の時間帯になる。だから娘を引き渡しに保育室に入ると、同じ二歳組の子どもたちはだいたいみんな揃^{そろ}っていて、ももちゃんだ、ももちゃんのパパだ、とか言いながら近寄ってきたり、それに応えて返事をした^り挨拶をしたりしながら父親は手提げから娘の着替えやマグカップ、食事用の口拭きタオルなどを取り出して所定の位置にセットしていく。娘には空になった手提げを渡して、ロッカーにしまってくれるよう頼むと娘は与えられたその任務に張り切って取り組み、その間父親の方も準備がスムーズに進められる。もともとそう毎日うまくいくわけでない。父親としてはそういう算段で臨むけれども、思い通りことが進む日の方が少ない。そもそもそれは保育室にたどり着いた時点で娘が泣いたりぐずったりしていないことが前提で、保育室の前で娘の気がのならなければまずはあの手この手でなだめたり、説得したり、場合によったら追いかけてつかまえて無理やり引きずってくるようになったり、逆にこちらが引つ張り回されたりどつかれたりしながら準備をすることになり、程度は日によって違うがむしろそういう日の方が多い。

①今日は上々の部類で、娘は保育室に入るとその場でぐるぐるまわりながら、海苔^{のり}巻きだー、と言う遊びをはじめたので、父親は娘がぐるぐるまわっているあいだに身の回りの品を各所に収めて、出席カードを担当保育士のあかりさんに渡した。娘は保育室にいたもうひとりの担任のみずきさんにぐるぐる遊びを危ないからと止められつつも、そのまま友達たちが遊んでいる輪に入っていく、ももちゃんじゃあね、と父親が声をかけてももう振り向かなかった。哀^{かな}しいが泣いて離れたがらないよりはこれでいい。保育室のドア横のガラスに張り付くようにして廊下を見ていたそうすけくんが真剣な表情で、新幹線、と言いながら手を伸ばしタッチを求めているので父親もこれに、新幹線、と応えてタッチを返して保育室をあとにし、玄関でサンダルを履いて外に出るとふいちゃんが園の前の道路^{あおむ}に仰向けで寝ていた。

ふいちゃんおはよう、と声をかけたがふいちゃんはこちらを向かず上を向いたままで、横に立っていたふいちゃんのお父さんとも挨拶を交わし、寝てますね、と言うと、寝てるんですよ、とお父さんは言った。

ふいー、と寝転ぶふいちゃんに声をかけるお父さんは、その呼び声にさまざまな感情を込める。ふいちゃんのお父さんの額には少し汗が浮かんでいた。ふいー、ともう一度繰り返す。マスクで口元が隠れたふいちゃんのお父さんの顔を見ながらもちゃんの父親は、と内心で自称して、その呼び声に込められたすべての思いがわかる気がする、と続けた。いつまでも付き合っているわけにいかない焦りや苛^{いらだ}立ちももちろんあるが、^②ここで怒ってさらに機嫌をこじらせたり泣き出したりしても事態は好転しない。だから責め立てるような響きは慎重に排されてあくまで穏やかに、お父さんは困っているんだということが伝わるように、そして娘に理解と行動を求めるべく、頼むというよりは願うように呼びかける。ふいー、とお父さんがまた繰り返す。

白線が引かれた路側帯に仰向けに寝ているふいちゃんは、しかしそんなお父さんの声にまったく応える様子がなかった。寝ているといっても眠っているわけでも眠そうなのでもなく、むしろふいちゃんの丸い大きな目はしっかりと開かれ、長いまつ毛も普段よりぴんと張っているように見えた。ふいちゃんの目玉は動くことなく、まっすぐ空を見ていた。

よく晴れて日差しは強めだが、少し風もあつて気持ちのいい天気だった。五月は子どもがいたっていなかったって気持ちのいい季節だったけれど、子どもが生まれて一緒に生活するようになると、子連れで屋外で過ごす時間がそれまでよりも長くなり、すると父親たちの五月の気持ちよさについての実感もまたちょっと変化した。^③ただ気持ちいいだけでなく、ありがたい気持ちになるのだ。

春先はまだ朝晩に冬の名残の冷え込みがあるが、五月になると夕方になっても寒さをあまり気にしないいい日が増える。日中の気温の上昇も穏やかで、なにより藪^{やぶ}や植え込みの近くにいても蚊がいないから、いまの時期は子どもを外で遊ばせるのにあれこれ心配がなくて助かるのだった。六月に入ると気温も徐々に上がってきて雨も増えるし蚊も出てくる。子どもと一緒に公園にいと体温が高く汗っばい子どもの体は蚊の恰好^{かつこう}の餌食で、親は寄ってくる蚊を追いかたり叩き潰^{つぶ}したりに忙しくなり、そもそも虫の多そうなところで遊ばせにくくなる。子どもだけでなく親の方も子連れで外にいる大半の時間は子どもの近くで遊び相手をしたり見守つ

たりしている時間だから、寒い日は寒いし、暑い日は暑いし、知らぬ間にあちこち虫にも刺される。でも五月はただ外にいるだけで、ただ立っているだけでも気持ちいい。そんな気持ちいい季節の晴れた朝だ。道路に寝転ぶのだって気持ちいいだろう。ふいちゃんは五月生まれで先週が誕生日だった。娘と同じ二歳組で、二歳組といってもその年度の誕生日で三歳になる年だからふいちゃんももう三歳になったわけだ。

こんな気持ちいい季節に毎年誕生日を祝えるなんて、本当に素晴らしいことだ。本当に、と内心で繰り返すこの、本当に、は娘が最近覚えた言い方で、本当にすごいよ、とか、本当に甘いよ、本当に眠いよ、とかいろんな言葉を強調しまくっている。ちよっとタメを利かせた芝居がかった言い方は、たぶん保育園で覚えたんだろう。昨日は公園でふいちゃんが娘と同じ言い方で、本当に恐竜、と言っているのを聞いた。だから園で流行^{はや}っているのかもしれない。娘のふいちゃんにうつったのかふいちゃんのが娘にうつったのかわからないし、あるいは誰か別の子がどこかで聞いたか、家族の口癖を真^ま似^ねたりしたものかもしれない。園の玄関の掲示板には園内で感染性の胃腸炎とヘルパンギーナ、手足口病が軽く流行中で、それぞれの発症人数が報知されていたが、幼児が集まって日々を過ごす保育園ではウイルスだけでなく語彙や語法や発音も経路のわからないまま伝わっていく。言葉以外にも、ちよっとした仕草とか友達に対する立ち居振る舞いとか、あらゆるものが受け渡され、学ばれ、そして試行されている。

④ そうなんですよね、とふいちゃんのお父さんは言った。ふいもこのあいだ夕方一緒に歩いてたら唐突に、お父さん長生きしてね、って言い出して。どこまで意味がわかって言ってるのかわからないんですけど、そんな物言いいつ覚えたんだろうって思ったんです、と話すふいちゃんのお父さんのマスクがずれて、見慣れない口元^{あち}が露^{あら}わになった。

園では職員や保護者の登降園時のマスク着用は四月から任意に切り替わり、五月の連休明け頃にはマスクを外す保護者もだいぶ増えてきた。花粉症シーズンが終わって気温が上がってきたこともあるだろうし、四月からひと月ほどで特に大きな状況の変化がなかったことも影響していたと思う。自分はいえれば、園内では口元にあてていたマスクを玄関から外へ出てあごまでずらしたところだった。ともあれ、この二年間マスクを着けた顔しか見てこなかったひとの素顔というか文字通りの全貌をこうして不意に目にする

と、勝手に思い描いていた顔と全然違って驚いてしまうことがある。ほとんど毎日のように顔を合わせていたのに急に別人になったみたいで、しかし別人のはずはなく、こちらが長いこと勝手に別人のような顔を思い描いていただけだ。しかしその顔はどこからきた誰の顔だったのか。

おとなだってそんな具合なんだから、生まれてからこっち家の外では大半のひとがマスクをしている世界で過ごし続けてきた娘やふいちゃんにとって、この春急速に顔面が露わなひとが増えつつある状況はどのように受け止められているのか、ちよつと想像がつかない。

園の保育士さんたちも、着用が任意の方針に切り替わると同時にマスクを外して仕事にあたるひとが多かった。そのことを思うと、ちよつと胸がつまるような、涙が出そうな感じになる、ともちちゃんの父親は思った。言語での意思疎通がままならないこともある保育の現場では、意思疎通やスキンシップにおいて表情や声に負うところも平時から大きいはずで、マスクで顔の半分が覆われた状態での保育の仕事はきつと相当な苦労があった。自分が娘を見る限り、保育士さんたちがマスクを外したことへの驚きや反応はほとんど見られなかったが、これはマスク着用でも不足のないよう彼らが娘に接していたからなんだろうともちちゃんの父親は考えていた。具体的な技術は素人にはわからないが、たとえばアイコンタクトの仕方や声量や声質の工夫、身振りなどを使って口元が隠れていることを補うための工夫が、制限の多いなかでも日々行われていたのではないか。娘は、この春、保育園で担任のあかりさんやみずきさんが、ももちゃん、と自分の名を呼んでくれるその口元をどんなふうに見ていたのだろうか。

娘の反応の薄さの反面、ももちゃんの父親は方針変更の期日の朝、保育士さんたちが素顔で園内にいるのを見たとき、いたく感動してしまつたのだつた。マスク着用の科学的な是非は自分には判断できない。あとになって任意に切り替えたのは時期尚早だつたとわかる可能性だつてあるのかもしれないが、そのときの感動はそういう是非とは関係がない、ともちちゃんの父親は言う。光差す朝の園内で、ずっと隠れたままだつた保育士さんたちの顔が露わになっているのを見たとき、^⑤彼らの三年間の見えない苦労と努力がネガのように一瞬反転してその光景に現れた気がした。それは彼らの苦労と努力であると同時に、彼らが娘たちのことを大切に思い

やってくれた確かな時間の表れでもあった、とももちゃんの父親は思った。あの瞬間のことは、その是非がたとえいかなるものであったにせよ、忘れることはないだろう。

A は隠れているものと現れているものとは現れているものの方が強く、二年間思い描き続けたマスクの下の顔たちは、記憶のうえでもほんのひと月足らずであっさり B に書き換えられていき、 C にも慣れつつあった。そして

D は徐々に思い出せなくなった。誰のものだかよくわからない顔たちが、誰のものだかわからなのまま思い出されなくなる。さようなら。

さまざまな対策の有効性について自分たちが証明することはできないのだし、それぞれに得た情報を信じたり疑ったり精査したりして判断するほかないからその判断の有り様は家族構成や仕事やその他のいろいろの事情に応じて少しずつ違うものになる。だからそのことをカジュアルに話題に挙げるのはまだなんとなく避ける向きがあった。それでも同じ年頃の子どもを持つ親や家族というのは、感染症の流行がはじまって広がりつつある時期に、母体とその胎内にいる子どもたちをできる限りその危険から遠ざけたい、しかしどうすればいいのかよくわからない、という同じ恐れを共有したひとたちだった。ふいちゃんの両親もきっとあのさなか、自分たちと同じように見えないウイルスを恐れながら過ごしていたのだと思うと、とももちゃんの父親はいつかその不安をみんなで^{ねぎら}労い合いたいと思う。

長生きしましょう、とふいちゃんのお父さんに言うと、ふいちゃんのお父さんは、ははは、と笑って、とももちゃんのお父さんも、と言った。お互いに長生きしましょう。そして寝転び続けているふいちゃんにまた視線を落として、ふいー、と言った。

ふいちゃん、とももちゃんもう部屋にいるよ、とももちゃんの父親はふいちゃんに声をかけた。日が違えばふいちゃんとももちゃんが、というかふいちゃんの父親と自分が逆の状況のこともあるからこういう場合は全力で助け合いたくなる。とももちゃんもいるし、そうすけくんもいたし、たもつちゃんもいたし、ちーちゃんもいたし、とももちゃんの父親はさつき二歳組の部屋で見た娘の友達たちの顔を思い出しながら、名前を挙げていった。こうたろうくんもいたし、りんちゃんときんちゃんもいたし、あとはえーつと、と

指を折りながら十二名いる同じ組の子どもたちのうち、ふいちゃん以外の子の名前を全員呼び上げて、あとあかりさんもみずきさんもいた、と保育士の名前も付け加えた。

ふいちゃんは微動だにしない。

朝起きてから登園まで、つまり親元に娘がいるあいだに多少の行き違いや滞りや衝突がないなんてことはまずなく、それらをいかに未然に防ぎ、生じた問題についてはそれ以上こじらせぬような穏便な解消に努めることで、トラブルを最小程度に抑えたい。とはいえ単にトラブルが少なければいいわけではなく、どんなに順調にことが進んでも園の引き渡しの際に機嫌が悪ければ意味がない。最終段階である保育室への入室、そして保育士さんへの引き渡しに最高の状態で入っていけるよう、あえてわがままやぐずりを泳がせて登園時間から逆算したタイミングまで機嫌をとるのを待つこともある。こちらの思い通りに動いてくれればなんでもいいわけでもなく、物で釣ったりするのは麻薬みたいなもので、使い過ぎると結局それではなくは動いてくれなくなる。これはとりうる選択肢の幅を自ら狭めてしまうようなもので、それは子どもにとっても気の毒だし親の方もあとあと苦勞することになると思うから、動かぬ娘をお菓子で誘導したりスマホの動画を見せたりするのはよほどどうしようもないときだけにしたい。というのは、いつだったか休みの日に公園でふいちゃんを連れとお父さんと出くわし、娘とふいちゃんが砂場で一緒に遊びはじめたのでその脇であれこれ話しているうちに自然と話題は日々の育児の苦勞話になって、そこで概ねおおむふたりが同じような理念と対処法を心中に掲げていることがわかったときのその骨子である。

それまでは送り迎えのときに顔を合わせて当たり障りのない世間話をする程度の間柄で、立ち入った話をする機会なんかなかったからか、^⑥その日のふたりの話はやけに盛り上がって、あとから思い返すとちよつと過剰なほどに互いに共感を表明し、日頃の奮闘を称え合った。細かい部分は我が家の状況に沿う言い方になってしまっているだろうが俺たちは、とももちゃんの父親はあえて一人称複数形に俺を選び、俺たちは語らい、共感したんだ、と言いたい。

先のような理念を掲げつつも、実際そんな思い通りにいかないから妥協と失敗の連続だ、という実情と歯痒さの吐露もまた、強いシンパシーとともに共有された。まわりをなんとなく観察していても、自分たちの考えがそう周囲と大きく異なることはないような気がする。どの家庭でもきつと同じようなことを考えては、理想と現実のギャップに悩んでいる。でも重要なのは理念の特異性ではなく、それが俺たちのもので、ふいちゃんのお父さんともちちゃんの父親のもので共有され、共感されたことだ、ともちちゃんの父親は念を押す。

ももちゃんとふいちゃんは〇歳組からずっと一緒だったから、親たちには同じ道を辿^{たど}ってきて、そして辿^{たど}っていくような仲間意識がなんとなく醸成されていたし、どちらも第一子で親にとってははじめての育児だったことも共通していた。ももちゃんもふいちゃんも生まれたときからずっと感染症対策のなかを生きてきたから、保育園の保護者間の交流も自^{おの}ずと遠慮がちなものになっていて、あの日の砂場の脇で生じたふたりの雑談のなかの静かな高ぶりにはその反動もきつとあった。保育園に限らず、他者と日常的で卑近な話を気軽にするような機会はずっと抑制されてきたのだが、気軽な雑談じゃないと話題に上がらない大事な話題というのがたぶんあって、育児において日々積み重ねられる経験値や試行錯誤なんかもそういう類の話なのかもしれない。

ふいちゃんは依然として道路上で仰向けになって空に目を向け、真剣な顔つきを崩さずにいた。ふいちゃんのお父さんは、ときどき、ふいー、とその名を呼びながら、さつき娘に長生きしてねと言われた話は実は少し詳細を端折^{はしよ}っていて、ともちちゃんの父親にもう少し細かい説明をしようか迷っていた。長生きしてね、という娘の言葉について、どこでそんな物言いを覚えたんだろう、とまるでよくある育児の話のように語ってしまったけれど、実はあれを言われた前日に神奈川の^⑦自分の実家を家族で訪れ、そこで最近少し体調を崩していた自分の父に向かって妻が、長生きしてくださいね、と言ったその言葉を^⑧娘は覚えていたんだと思う。ちゃんと意味がわかっているかは怪しいが、大事なひとをいたわるニュアンスはきつと感じ取っていて、それを父親である自分に向けてくれたのだと思う。それは結構忘れたい瞬間だったから、いたずらな改変ではないにしろ、背景の事実を捨象して話してしまったことは、娘に対するちょっとした罪悪感を生じさせた。しかしその背景を話しはじめたなら、話は自分と^⑨父親のあいだにかつてあつ

た確執や幾度かの衝突と雪解けを経て現在の、良好とまではいかないがときどき孫の顔を見せに行ける程度の関係性に至った経緯を話す必要が生じるかもしれず、それは煩雑だった。

感染症の心配がもう少し薄れたらもちろんのお父さんを一度飲みにも誘いたい、とふいちゃんのお父さんは思うが、子どもを妻に任せて父親同士が飲みに出るのは実務的にも心理的にもまだなかなかハードルが高く、それが実現したのはこの何年もあとのことだった。送迎の頻度や服装なんかを見ると、自分も相手も基本的に在宅で仕事をしているように見受けられるが、自分たちは互いがどういう仕事をしているひとなのかいまはまだ全然知らなかった。

ともあれ^⑩このひとはだいたい子どもが好きで、いまでも自分の子の預け入れは済んだのにここにとどまって一緒に路上に寝ている娘を見下ろしている。子どもだけでなく、保育園が好きなのかもしれない。たぶん一年くらい前、娘たちが一歳組にあがって、同じ組の子どもが一気に増えた頃だが、もちゃんの父親は子どもを預け入れたあと、あとから登園してくる子どもや保育室の外を通りかかる子どもと遊び続けてしまい、なかなか帰らないので保育園からやりわり注意を受けているのも見たことがあった。感染症対策がいまより厳しく、送迎時の滞在時間もできるだけ短くするように言われていたし、体面上は子どもを預けたあとは就業時間になるわけなので、保育園でのんびりしてはまずいわけだ。

今朝の娘は保育園までとはいつもと変わらず来たのだが、恐竜を見たいと言うのに、恐竜はいない、と応えたのが失敗だった。同じやりとりはこれまでも繰り返されたことがあり娘は恐竜が大昔に絶滅した話を聞くと、恐竜はいる！と主張してときに激怒し、ときに泣き喚き、今日の場合は道路に寝そべって登園拒否の姿勢をとったのだった。いつからこんなに恐竜が好きになったのかもうよく思い出せないが、日に日に娘が口にする恐竜の名前は増え、どこで覚えてくるのか親の自分も聞いたことがないような名前もあり、適当に言っているのかと思って調べてみるとちゃんと実在する名前で、図鑑を見てはいっけんどれがどれだか見分けのつかないようなものも、ちゃんと見分けて精確に名前を言い当てる。最近ではすごいねえと褒めるのを通り越し、その入れ込み具合と極端な知識がちよっと怖く感じることにさえあった。

ゆっくり流れていく薄い小さな雲や、ときどき横切る鳥や飛行機はもちろん、ずっと見続けていれば空の奥の奥、夜にならないと見えないはずの星の影さえも青空のなかに見えてくる。薄い青色の向こうに夜空みたいな暗い広がりがあるのがわかって、あのどこかになにかがいる。お化けもいる。宇宙もいる。そしてたぶん恐竜たちもいる。本に載っている恐竜の名前と形を次々に覚えたのに、本当の恐竜は未だ^{いま}見ることができない。恐竜はいない、とお父さんもお母さんも言うのだった。あれは大昔の生き物だと言うが、あんなに大きい生き物がどうしていなくなるのか。ふいちゃんにはそれが信じられない。なにが本当ではないことを教えられている気がした。本のなかにはこんなにもたくさんの恐竜がいて、平気そうにしているのに、恐竜がどこにもいないというのはなにかおかしい。いないわけじゃなくて、電車や車で簡単に見に行けるような場所にはいないというだけで、どこか遠くにいるってことなんじゃないか、とふいちゃんはさっき思った。だったらそう教えてくれればいいのに、連れて行けとせがまれたら困るから、どこにもいないなんて言う。ふいちゃんはまだ知らないことはたくさんあるが、数少ない知っていることのひとつは、どこにもいないものなんてない、ということだ。恐竜でも、人間でも、誰でも、必ずどこかにはいる。そんなの当たり前のことじゃないか。恐竜がいないなんて嘘^{うそ}はあまりにその場しのぎの詭弁^{きべん}である、とふいちゃんは思っていた。たとえば、と道路に寝転んでみる。遠くて行けないならその遠さを地面から離して空に向けたらいい。考えてみれば空だって、そこにあるようでどこにあるのかよくわからないもので、しかし空がないなんていうひとはいない。夜になると空の奥から暗い方の空がじわりじわりとせり出てきて、星の輝く夜空になる。あれもまた恐竜の類かもしれないし、あの暗い宇宙というらしい夜の空の一角の広がりはどこかに恐竜たちがうようようよ草を喰^はんだり、襲ったり襲われたりしながら暮らしている。あ、イグアノドンだ。晴れた空に目を凝らせばそれが見えるかと思つたら、やつぱりちよつと見える。あ、プテラノドンも見えた。宇宙も、恐竜のいる星もずっと見ているとだんだん見えてくる。いるいる、ティラノサウルスもいるし、ブラキオサウルスも、ステゴサウルスもいる、本当にいる。本当に見える。恐竜に長生きしてほしい。

空高くを見つめ続けながら恐竜の名前を唱えはじめた娘の横にしゃがみこんで、ふいちゃんのお父さんは、^⑪ たしかに二億年前に地球上に現れてやがて絶滅した、なんてそんな話をどう説明したらいいのか本当のところはわからない、と思つた。

イグアノドン。

いるいる。いたよ。

トリケラトプス。

トリケラトプスもいた、二歳組の部屋に来てた。

アンキロサウルス。

いたいた。二歳組の部屋で遊んでた。だから行ってみなよ。

ももちゃんのお父さんがいい加減なことばかり言ってくるが、保育園には恐竜はいない。保育園に恐竜がいたら大変なことだ。そんなこともわからないのか。そんなこともわからないと思っているのか。空の向こうにいるのが、やっと見えたところだ。いまここから動いたら見えなくなりそうだから。^⑫今日は一日ここでこうしている、ここで恐竜を見ている、とふいちゃんは思った。

しかし、今日は遅番だったらしい保育士のゆみさんが通勤してきて、ふいちゃんおはよう、一緒に行こう、と声をかけるとふいちゃんはさっきまでの膠着^{こうちやく}状態が嘘のようにすっと立ち上がってお父さんを顧みることもなく玄関から園内に入っていく、^⑬さつさと保育室に向かって歩いていった。ふいちゃんのお父さんはももちゃんの父親に、すいませんじゃあまた、と会釈をするとふいちゃんを追いかけて玄関に向かった。

【問1】 傍線①「今日は上々の部類」とありますが、どういふことですか。最も適當なものを次の中から選り、(イ) (ホ) の符号で答えなさい。

- (イ) 冷静さを失つて暴れまわっている娘だが、ほかの友達に危害を加えるほどではない、ということ。
- (ロ) 普段は内気な性格だと言われている娘が、今日は友達が遊んでいる輪に入つていった、ということ。
- (ハ) 今日の娘は、父親の言うことこそ無視するが、保育士の言うことには素直に従っている、ということ。
- (ニ) 娘はぐるぐるまわっているが、それでも普段に比べたら今日の振る舞いはまだいいほうだ、ということ。
- (ホ) いつも機嫌の悪い娘だが、今日は上等な海苔巻きを手に行っている、なかなか機嫌が良い、ということ。

【問2】 傍線②「ここで怒つてさらに機嫌をこじらせたり泣き出したりしても事態は好転しない」とありますが、どういふことで

すか。最も適當なものを次の中から選り、(イ) (ホ) の符号で答えなさい。

- (イ) 親の考えを一方的にぶつけてしまえば、ふいちゃんの気持ちないがしが蔑ろにされてしまう、ということ。
- (ロ) ふいちゃんの気分が害されてしまえば、保育園への引き渡しはますます難しくなる、ということ。
- (ハ) ふいちゃんに不信感を持たれてしまうと、いっそう今後の子育てに苦勞してしまう、ということ。
- (ニ) ふいちゃんの機嫌が悪くなつてしまつたら、預かつてくれる保育園に迷惑がかかる、ということ。
- (ホ) 保育園に行くことを無理強いしてしまつては、結局ふいちゃんのためにはならない、ということ。

【問3】 傍線③「ただ気持ちいいだけじゃなく、ありがたい気持ちになるのだ」とありますが、なぜですか。最も適当なものを次

の中から選び、(イ)～(ホ)の符号で答えなさい。

- (イ) 虫さされや気温の心配のない五月は、子どもを持つ親にとって実際に負担が軽くなる時期だから。
- (ロ) 自然とのふれあいを第一に思う父親は、五月を子どもが屋外で遊べる貴重な季節だと考えたから。
- (ハ) 五月生まれの子どもを持ったことにより、毎年屋外で誕生日のお祝いができるようになったから。
- (ニ) 五月の気候が他の季節に代えがたいように、子どもの存在をかけがえのないものだと感じたから。
- (ホ) 実際に子どもを育てる立場になったことで、ゆたかな自然に対して感謝できるようになったから。

【問4】

傍線④「そうなんですよ、とふいちゃんのお父さんは言った」とありますが、これに関する次の説明文の空欄a～dに当てはまるものを後の選択肢からそれぞれ選び、(イ)～(チ)の符号で答えなさい。

ここまで読み進めて、「この物語、ちょっと読みにくいな……」と思った人がいるかもしれません。人間関係やストーリーがそれほど複雑というわけでもないのに、なぜそのように感じるのでしょうか。少し考えてみましょう。

この物語は、冒頭からもちやんの父の a が語られるかたちで進んでいきます。しかし、ふいに挿^{はさ}まれる「そうなんですよ、とふいちゃんのお父さんは言った」という一節は、もちやんの父がこのとき、実はふいちゃんの父と b をしていたことをあきらかにします。あるいは別の場面では、目のまえで起きたことを語っていたはずのもちやんの父が、いつのまにかコロナ禍の三年間の経験について c を始めている、なんてこともあります。さらに、もちやんの父の d から見たもの・聞いたものが語られていると思いきや、それが唐突にふいちゃんの父のものに切り替わっている、ということもあります。このように、この物語に対しては、いつ／誰が／どのように語っているか、といったことが曖昧にされている、という特徴が指摘できます。この物語に読みにくさがあるとすれば、それは以上のような特徴に起因するのでしょうか。

しかし、よく考えてみれば、わたしたちの日常生活において、急になにかを思い出したり、話しながら話題がどんどん逸^それていったり、ということは頻繁に起こっています。だとすれば、この物語はむしろ、そんなわたしたちのありようを精確に反映しているとも言えるのです。

- | | | | | | | | |
|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|
| (イ) | 回想 | (ロ) | 会話 | (ハ) | 視点 | (ニ) | 時間 |
| (ホ) | 創作 | (ヘ) | 対立 | (ト) | 多様 | (チ) | 内心 |

【問5】傍線⑤「彼らの三年間の見えない苦労と努力がネガのように一瞬反転してその光景に現れた気がした」とありますが、ど

ういうことですか。最も適当なものを次の中から選び、(イ)～(ホ)の符号で答えなさい。

(イ) 保育士がマスクを外す光景は、これまでマスクの着用を強いられてきた彼らの苦労が、一瞬のうちに努力の成果として認められたことを示すようであった、ということ。

(ロ) マスクを外した保育士の顔に、これまで表情を隠したまま子どもと接しなければならなかった彼らの困難と、そのなかでおこなってきた工夫を見出した^{みいだ}、ということ。

(ハ) マスクを外した保育士の顔を見たとき、彼らが続けてきた苦労と努力が一瞬にして否定されてしまったように感じ、彼らの顔を見続けるのがつらかった、ということ。

(ニ) 保育士がマスクを外すことには抵抗感もあったが、マスクを付けたときの彼らの試行錯誤を想像したら、抵抗感を覚えること自体が失礼だと気がついた、ということ。

(ホ) マスクを外した保育士の顔がいつも思い描いていた顔と違ったため、彼らに一瞬だけ否定的な感情を抱いたものの、そのような感情はすぐになくなった、ということ。

【問6】空欄A～Dに当てはまる言葉を次の中からそれぞれ選び、(イ)～(ニ)の符号で答えなさい。

(イ) マスクの下にあるはずと思い込んでいた顔たち

(ロ) はじめは戸惑った誰彼の素顔

(ハ) 目に見えるひとの顔

(ニ) マスクを外した顔

【問7】

傍線⑥「その日のふたりの話はやけに盛り上がって、あとから思い返すとちよつと過剰なほどに互いに共感を表明し、日頃の奮闘を称え合つた」とありますが、これに関する次の説明文の空欄a～dに当てはまるものを後の選択肢からそれぞれ選び、(イ)～(チ)の符号で答えなさい。

ももちゃんの父とふいちゃんの父は、この場面において、aを通して互いに共感を表明しています。そこにはもちろん、同じ道を辿つてきたというbもあつたでしょう。他方、ももちゃんの父は、この過剰な共感について、子どもが生まれてからここまでcを控えていたことへの反動もあつただろう、と振り返っています。だとすれば、ももちゃんの父とふいちゃんの父におけるこのときの盛り上がりには、dに対する晴れやかな気持ちも混じっていたのかもしれませんが。

- (イ) 感染症対策が緩和されてきたこと
- (ロ) 家族や保育園に対する愚痴や不満
- (ハ) 仕事以外の個人的な趣味や楽しみ
- (ニ) はじめての子育てに関する苦労話

-
- (ホ) 子どもらが秘めている無限の可能性
 - (ヘ) 他者との気の置けない語らいや交流
 - (ト) 家族にも話せないような悩みの相談
 - (チ) 同じ年頃の子を持つ親同士の仲間意識

【問8】 傍線⑦「自分」、⑧「娘」、⑨「父親」、⑩「このひと」は、それぞれ誰を指していますか。適当なものを次の中から選び、

(イ) ー (ヘ) の符号で答えなさい。

(イ) ももちゃん (ロ) ももちゃんの父 (ハ) ももちゃんの祖父

(ニ) ふいちゃん (ホ) ふいちゃんの父 (ヘ) ふいちゃんの祖父

【問9】 傍線⑪「たしかに二億年前に地球上に現れてやがて絶滅した、なんてそんな話をどう説明したらいいのか本当のところは

わからない」とありますが、どういうことですか。最も適当なものを次の中から選び、(イ) ー (ホ) の符号で答えなさい。

(イ) 恐竜が絶滅したのはあまりにも昔の出来事であり、まだ二年しか生きていない娘にそのことを実感してもらう術はなかなか見つからない、ということ。

(ロ) 絶滅したときの恐竜の気持ちを表現できない以上、恐竜はすでに絶滅してしまったという事実を娘に伝えても納得してもらえないだろう、ということ。

(ハ) 恐竜が絶滅した理由についていちおう説明することはできるが、その説明は難しすぎて二歳の娘に理解できるものとはとうてい思えない、ということ。

(ニ) 高い空を見上げながら恐竜の名前を唱え続けている娘を見ていたら、本当にこの広い宇宙のどこかの星に恐竜が住んでいる気がしてきた、ということ。

(ホ) 恐竜はすでに絶滅したなんてどこかで聞きかじってきた説明は、いままさに恐竜の存在を感じている娘に対して説得力をもたないだろう、ということ。

【問10】

傍線⑫「今日は一日ここでこうしている、ここで恐竜を見ている、とふいちゃんは思った」とありますが、これに関する次の説明文の空欄a～dに当てはまるものを後の選択肢からそれぞれ選び、(イ)～(チ)の符号で答えなさい。

ふいちゃんは空を見上げながら恐竜に長生きしてほしいと語りますが、この「長生きしてほしい」という言葉は、ふいちゃん一家が実家を訪ねたときに、ふいちゃんが耳にした「長生きしてね」という言葉から来ていると言えます。実家の父を訪ねるこの場面を振り返ったとき、ふいちゃんのこの言葉には **a** が含まれている、と考えることができますでしょう。さて、そんなふいちゃんからしたら、親たちによる恐竜はもういないという言葉は、いかにも **b** に思えます。ましてや、恐竜たちが二歳組の部屋で遊んでいたなどというももちゃんのお父さんの言葉は、あまりにも見え透いた嘘だと感じられます。

大人というのは、子どもがおこなうことに対し、たとえそれが本人にとって切実なものであっても、 **c** にしか捉えないようなところがあるかもしれません。でも、子どものほうは **d** を過ごしているはずなのです。このときのふいちゃんがそうであったように。

- (イ) 子どもなりの大切な時間
- (ロ) はてしない宇宙の広がり
- (ハ) 才能豊かな子どもの発想
- (ニ) 単なる子どもの気まぐれ

- (ホ) 自分を言いくるめようとするもの
- (ヘ) この世界に生きているという実感
- (ト) 大事な存在をいたわるニュアンス
- (チ) たくさんの勉強によって得たもの

【問11】傍線⑬「さっさと保育室に向かって歩いていった」とありますが、これに関する次の説明文を読んで、(1)～(4)につ

いて適当なものを選び、それぞれ符号で答えなさい。

この物語は、ふたりの子どもが保育室に入るまでを描いたものです。その意味では、ある一日の日常的な風景を切り取ったものと言えます。しかし、その日常的な風景こそがゆたかな世界を彩っているのです。たとえば、ももちゃんは最近「本当に」という言葉をよく使います。そのときの「タメを利かせた芝居がかった言い方」は、ふいちゃんにも見られるものです。ももちゃんの父はこのとき、娘たちによる「本当に」という言い方のむこうに、

- (1) (イ) あらゆるものをお互いに受け渡すような
(ロ) お互いに励まし合って学んでいくような
(ハ) 流行りのものをお互いに見せ合うような
- 保育園内の交流をしています。

あるいは、ふいちゃんの父は、娘が自分に向けた「長生きしてね」という言葉のむこうに、

- (2) (ニ) 自分自身が父親に抱いていた気持ち
(ホ) 父親が育児をする人に向けた気持ち
(ヘ) 妻が自分の父親を思いやった気持ち
- と同じものを見ます。

このときの娘の言葉はなにげないものかもしれませんが、ふいちゃんの父は、この言葉をかけられたときのことを「結構忘れがたい瞬間だった」と振り返っています。その背後には、自分の父親とのあいだにあった「確執や幾度かの衝突」、その後の「雪解け」といった経験も含まれているでしょう。

さて、道路に寝たまま動こうとしないふいちゃんは空のむこうになんを見ているのでしょうか。ふいちゃんは一見すると保育園に行きたくなくて駄々^{だだ}をこねているようにも見えますが、その実、

(3)

- (ト) 大人に対して反抗する姿勢を示しているのです
- (チ) 空を見続ける理由をしつかり持っているのです
- (リ) なにも考えず感情のままに行動しているのです

。

その後、遅番だった保育士のゆみさんに声をかけられると、ふいちゃんはすつと園内に入って行きます。こうして子どもたちが保育園に引き渡されるまでの物語はあっさりと閉じられます。

この物語は、おそらく時間にしたら一〜二時間ほどのなにげない日常的一幕です。しかし、その言動のひとつひとつには、

(4)

- (ヌ) 子どもにしか解けない重大な謎が隠されています
- (ル) さまざまな人の記憶や感情が折り重なっています
- (ヲ) 日常のなかに潜む幻想的な世界が描かれています

。

新型コロナウイルスは人々のなにげない日常を奪ってしまいましたが、それは一方で、日常におけるかけがえのなさを気づかせるきっかけになりえるでしょう。この物語が新型コロナウイルス以降の時代を描いていると言えるのはなによりこの物語が、なにげない日常のむこうにあるかけがえなさに目を向けているからにほかなりません。

【出典】

Ⅰ 鷺田清一『想像のレッスン』（ちくま文庫、二〇一九年）一八頁～二二頁、一五七頁～一六三頁※ただし、問題作成の都合上、

一部省略したところがある。

Ⅱ 滝口悠生「恐竜」、『文藝』^{ぶんげい}（河出書房新社、二〇二三年秋号）三八九頁～三九六頁

